

Brave

旅人（バックパッカー）が書き、旅人が読む、旅人のための旅ライフフリーマガジン

一人旅：南極

タビテク

特集アジア

カンボジア タイ

ラオス 台湾

自炊派の手料理

旅の便利グッズ

創刊号

CONTENTS

■テーマ「ひとり旅」

- ・ 南極

■タビテク

- ・ 「おねだり」術

■旅で使えるデジタルアプリ

- ・ VoiceTra

■「酔い道」旅先の酒と肴

- ・ カンボジアビール

■特集アジア

- ・ プノンペン

- ・ 日本脱出したことを疑われる台北滞在の日々 《台湾・台北編》

- ・ 台湾人は神様です 《台湾・台南編》

- ・ 君がいたあの夏は遠い夢の中?台湾夜市巡り 《台湾・台南編》

- ・ ラオスにある秘境

- ・ <アジアショートコラム>タイのローカルデザートでホッと一息

■旅の便利グッズ

■自炊派の手料理

- ・ カレースープパスタ

■世界のポストコレクション

■編集後記

■次号予告

■記事募集

■Writer & Photographer

岡部能直

■Age

33歳

■Profile

32歳で会社を退職。2009/12/31からアジア、ヨーロッパ、アフリカ、南米など、世界の絶景や世界遺産を中心に世界放浪中。南極大陸上陸にて七大陸制覇。

<http://ameblo.jp/ok-be/>



南極。

何十万年もの間に蓄積された氷床に覆われた氷の世界。

水色を凝縮させたかのように澄んだ流氷が、無数に漂いきらめく海。

ペンギンや、クジラ、アザラシなどの海洋生物が生命を営む最後の楽園。

日本から16,000km離れ、今もなお人間が暮らすことを拒んでいる極寒の大地に僕は向かった。

『ニューヨークへ行きたいかぁ！！』

子供の頃、毎年のように見ていた『アメリカ横断ウルトラクイズ』。テレビの中では福留アナウンサーが叫んでいた。

参加者はジャンケンをし、機内でテストを受け、荒野に舞う問題を拾い、さらにドロコになって、早押しボタンを押していた。決勝の地は自由の女神の前に浮かべた船上。

テレビに映る、自分が目にしたことのない世界にワクワクした。

その中で特に印象に残っていることがある。

「ニューヨークにある自由の女神像の王冠には7つの突起が施されていて、それは7つの大陸、7つの海を表している。」

この地球上には7つの大陸が存在する。

一般的に大陸の定義に厳格な基準は存在しないらしいが、七大陸を指す場合は、アジア大陸、アフリカ大陸、北アメリカ大陸、南アメリカ大陸、南極大陸、ヨーロッパ大陸、オーストラリア大陸の順に大きい。

大陸とは呼ばれないほど小さな島国で育った僕には、その当時、北アメリカ大陸を横断することでさえスケールがデカすぎて、全く現実味のない違う世界の話のように聞こえていた……。

そもそも南極へ行こうとは思ってもいなかった。

むしろ行けるものだとも思ってもいなかった、というのが正直なところだ。

南極観測基地に勤める、ある意味特殊な人たちだけが上陸を許された場所のような気がしていた。

それが今回の旅の最中、旅人伝いに南極に行った話を聞き、いつしか七大陸制覇しよう、南極に行こうと、僕は今回の旅の最中に南極に行くことを決めた。

南極に行こうと決めた僕は、旅の最中に会った友人夫婦と3人で、出発地点である世界最南端の都市、アルゼンチンのウシュアイアを目指した。

人はそこを『世界の果て』と呼ぶ。だが南極はそこよりもさらに南に位置するのだ。

ウシュアイアが『世界の果て』と呼ばれているのだから、南極はいったい何になるのだろうか。

世界の果ての更に先……。もう世界じゃないのかもしれない。

世界の極み。世界の極限がそこにあるのかもしれない。期待に胸が膨らんだ。

出航の日。

港に着いた僕らの目の前に、これから11泊12日の旅に連れて行ってくれる船が停泊していた。船はおよそ100人乗りの中型オランダ船。僕らの泊まる部屋は6畳程のスペースに2段ベッドが2つある4人部屋。シャワーもトイレも室内についている。外観は多少錆びれていて、タイタニック号などの豪華大型客船からは程遠いものの、今年リノベーションしたばかりという船内は小綺麗で、ちょっとしたビジネスホテルを連想させる。

乗客の大半は50歳を超えているであろう欧米人のカップルが占め、30歳そこそこの僕ら3人は一番若い乗客だろう。

僕らは、余った席を埋めるための安チケットを購入して乗船しているが、通常はべらぼうに高いツアーなのだ。リタイア後の余暇を楽しむカップルが多いのも頷ける。

そして18時、僕ら3人を含む乗客約80名を乗せた船は、世界の極限を目指すべく世界最南端の都市ウシュアイアを出航した。

出航から3日間、『荒れ狂う』という表現がぴったりなほどのドレーク海峡が、南極へ向かう僕らの行く手を阻むように立ちふさがっていた。

船は右へ左へゆっくりゆっくりと傾くこと繰り返し、僕らは左へ右へバランスをとることを余儀なくされた。

乗客のほとんどが酔い止めの薬を飲んでいたりみたいだが、僕は乗り物酔いなどこれまで一度もしたことがないという自負から、薬を飲んだら負けだと一方的に勝負を挑み、「船酔い」というものをちょっとかじった。

ドレーク海峡越えの最中は、船の中では南極の天候について、南極の氷と海について、ペンギンについてなどの講習会が開かれたが、任意参加だったためか、約半数程度の乗客しか参加していなかった。食事時にも来ない乗客もいたのは、船酔いのせいだったのかもしれない。それほどドレーク海峡は荒れていたのだ。

出航から4日目の朝、遂に船は南極大陸の端、南シェットランド諸島沖に到着した。船のデッキに出てみると、船内の調節されたぬくぬくとした温度とは違い、急に肌のひりつくような冷たい空気に毛穴が引き締められ、南極に到着したという実感がふつふつと沸いてきた。初めて目の当たりにする南極の島。乗客は皆ざわめいていた。これから5日間、天候に問題がなければ、毎日午前と午後に1回ずつの上陸が予定されている。

そして僕らは早速上陸準備をするべく部屋に戻り、防寒着を着込み、ゴム長靴に履き替え、上陸用のボート乗り場に向かった。船からゴム製のゾディアックボートに次々に乗り込んでいく乗客。10人程度ずつ乗せたボートは次々に陸へ向かっていった。

僕ら3人は4艇目くらいのボートに乗り込んだ。目を開けていると涙が出てくるくらい冷たい空気を分けて進むボートからは、上陸ポイントがもう滲んで見えている。

先発していた何艇かに乗り込んでいた乗客が既に上陸を果たしていて、海岸で出迎えてくれていたペンギンやアシカ達の歓迎を受け、皆一様に浮き足立っているようだった。

そして遂に僕らの乗ったボートも、ズズッと陸地に底を擦るように着岸。ゴム製ボートの縁を跳ねるように跨ぎ、僕自身七大陸目、南極の大地を踏みしめた。足の裏から、過去に降り立った六大陸の思い出が湧き出てくるような気がして、感慨深いもの

があった。

僕らは早くペンギンやアシカに近付きたい衝動を抑えながらも、しばらく上陸の証明をするかのように、大地に足を付けた写真を撮り続けた。

そして初めて向き合う野生のペンギン。

ペンギンの歩く姿、ペンギンの顔アップ、ペンギンとのツーショット。

ペンギンの可愛らしさを収めようと、ここでも写真を撮りまくった。そういえば上陸してからカメラのシャッターを押し続けているような気もする。

すると今まで気が付かなかったが、海岸をちょっと上がった付近に人が集まっているような気がした。近付いていくとそこには無数のペンギンが集まってなにやら佇んでいる。軽く200羽は超えているだろう。その集いは何箇所にも点在していた。

この島はチンストラップペンギン（ひげペンギン）のコロニー。

口と、額から尻尾にかけての背面が黒く塗られ、更に人間の耳にあたる位置から顎にかけて黒い線が入っているのが特徴だ。僕らはそのアイドルを「ヤクザペンギン」と呼んだ。

両手を翼のように横、いやむしろ後ろに反らせながら胸を張り、左右に体を振りながらヨチヨチ歩くペンギンはとても愛くるしく、無邪気で、いつまで見ていても飽きなかった。

僕には、檻にも囲われていない、人間の暮らさない超自然の中で自由に生きている彼らは、決して飛ぶことのできない鳥だが、自由に飛んでいるようにも見えた。



5日目の午後、上陸4度目にして、まさに南極大陸本土に上陸する時を向かえた。

というのも、今まで上陸していたのは南極大陸付近にある島。

我々の住む日本という島もアジア大陸本土かどうかと聞かれると賛否が分かれそうなものと一緒に、今度こそ南極大陸本土への上陸である。

英語がほとんど話せない僕らは、今まで上陸していたのが南極大陸そのものだと思っていたものだから、寝耳に水だ。普通に勘違いをしていたのだが、二度も上陸感が味わえるなんて、逆に幸せなのかもしれない。

と、つくづく僕はプラス思考で良かったと思う。

天気はこの旅の中で一番の晴天。

船は湾に停泊していたため、さざ波すら立たない海が、鏡のように南極の大地を映していた。



氷で覆われた大地もこの暖かさで緩んでいるのか、時折轟音を立てて氷河の崩れる音がする。

僕らはまたゾディアックボートに乗り換えて上陸を果たした。今度こそ正真正銘の南極大陸の大地である。

僕は前日の感動を思い出すかのように過去降り立った六大陸を再び思い出し、僕らは改めて上陸証明写真を撮りあった。

ここにもペンギンのコロニーがあった。ここにいたのはジェンツーペンギン。

このペンギンも可愛らしく、顔から頭部が黒く塗られているのに目から眉毛にかけてが白く、口ばしがオレンジ色をしていた。

水辺には無数のペンギンが水浴びをし、体を干しているかのようにじっとしているペンギンもいれば、数匹で追いかっこをしているペンギン達もいた。

ペンギンコロニーのすぐ背後には何十万年もの間に固められたであろう氷河が大地を覆っており、今にも崩落しそうにミシミシと音を立てていた。

時には目の届かない所で崩落が起きているのか、大きな派手な音が聞こえてきた。



僕は、崩落の瞬間をカメラに収めようと、斜めに傾き今にも崩落しそうな氷壁に狙いを定め、

それをじっと見つめ続けた。本当に今にも崩落しそうだった。任意参加者で展望スポットまで登ったが、その間も監視していた。展望スポットではその氷河を背景に写真を撮りあった。すると僕が狙っていた氷河のすぐ傍の一部が、ゴゴゴォ〜という音を立てて崩落した。氷河を背景にポーズをとっていた皆も振り向き、落ちる瞬間や水しぶきに唾を飲み込んだ。

そういえばこの氷河は再生されていくのだろうか。一部が崩落して海に戻ろうとも、また新しく大地に雪が降り積もり、地を固めていくのだろうか。南極の一部では、この地球温暖化が問題になっている最中も気温が低下しているようだ。ただ、他の大部分は気温上昇により氷河も減り続けているらしい。僕らは南極の自然を守る為に何ができるのだろうか。。。

6日目の午前、あいにくの曇り空だったが、ゾディアックボートで上陸しようとしていた際にアザラシがペンギンを捕食するシーンに出くわした。最初はアザラシが鼻から上の顔を出して、我々の様子を監視している認識だけだったが、海面すれすれに潜らせている口にはペンギンが啜えられていた。

ペンギンにはまだ息もあった。アザラシの間隙を見てはその口から必死に脱出し、力なく逃げ出すペンギン。そのペンギンを弄ぶかのようにアザラシは追いかけて再び啜え込み、海中へと潜っていく。すると海中で脱出したのか、ペンギンがプカリと浮いてきて、そして再び力なく泳いで逃走を試みる。

次第に満身創痍に、精根尽き果てていく様子をリアルに感じて、愛らしいペンギン達と触れ合ってきた僕ら乗客はペンギンを助けてやりたくてたまらなかった。そんな中、乗客の一人がペンギン救出をスタッフに懇願した。スタッフの答えはNO。もちろんそんなことをしてはいけないのは理解している。これが自然の摂理、食物連鎖。それこそが南極に生きづく動物達の生命の営みなのだから。

そしてペンギンはまるでぬいぐるみのように動かなくなった。完全にペンギンの動きを止めたアザラシは、テーブルに凜と置かれたフォークとナイフを両手に持ち、一口サイズにして口に運んでいく。というわけもなく、口でペンギンを啜えたまま首を右に傾けたかと思えば、ブルンツと左へ振り回し、遠心力で肉を引きちぎっていく。何度となくそれを繰り返す。体の皮が剥げて、肉や骨が露になったペンギンを見ていて、なんともいたたまれない気持ちだった。



7日目の朝、僕らは遂に南極圏に突入した。

南極大陸には到着していたのだが、南緯66.33度以南を特に南極圏と呼ぶらしい。南極圏内は年に1日以上、太陽の沈むことのない白夜と、太陽の昇ることのない極夜が訪れる、更に過酷な土地。

僕らが南極圏に突入した日の午後、願ってもなかったクジラショーを観ることができた。

突如船に近づいてきたザトウクジラ2頭。

船の周りを悠々と泳ぎだした彼らは、時折尾びれをゆっくりと持ち上げては沈んでいく。

そして3分ほどしてから浮かんで来てはまた船の周りを泳ぎだし、ゆっくりと尾びれを持ち上げて、沈んでいく。

浮かんでくる場所は一定ではないので、我々乗客達は歓声の起こった方向を感知し、船首から船尾へ、左舷から右舷へ走ってクジラたちのパフォーマンスを観に行くのである。

そんなことを10回も繰り返した頃だろうか。徐々に突然の来訪者に慣れたであろうクジラが1頭、船の左舷にプカプカと浮かんでいた。時折潮を吹いて観客を惹きつける。

するとその浮かんでいるクジラ目と鼻の先から、先ほどから見えなかったもう1頭のクジラが頭をズンズンと突き出して昇ってきた。

胸びれが現れるくらい昇ったクジラはゆっくりとそのまま沈んでいった。

観客も突然のサービスに歓声を上げながら、アンコールを贈り続けた。

クジラも我々の期待に答えてか、もう1度それを繰り返した。



クジラの何という習性なのかも、どのような時の行動なのかもわからなかったが、クジラの魅せ

てくれたそれは、まるで我々の南極圏入りを歓迎しているようだった。

そんな興奮冷めやらぬ中、ひたすら南下をしてきた我々の船も、帰途へつかなければならない時間を迎えた。

ウシュアイアへ向けて折り返しの時。

出発の瞬間を迎えた船は、その人懐こいクジラ達に別れを告げ、北上を始めた。

その船の後ろをしばらく2頭のザトウクジラは追ってきた。いま歓迎したばかりの来訪者をまるで惜しみながら見送るように。

僕はそんな瞬間がずっと続いて欲しいと思った。

この地球上には7つの大陸が存在する。

そもそも昔はアメリカに行くのでさえもたいそうな事だったに違いない。

だが今や、アメリカに行くことすら容易くなかった当時とは違い、プラザ合意による急激な円高、渡航におけるビザ免除の影響で、アメリカをはじめ海外に気軽に行けるようになった日本人は、そのほとんどの大陸を観光地としている。

僕は旅行をする度にいつも思う。日本人でラッキーだと。

旅行なんてそもそもしなくても死にはしないし、言ってしまうばただの道楽だ。

日本は世界でもすごく裕福な国なので旅行することがそこまで贅沢なことではないし、およそ世界には200もの国家が存在する中で、海外を自由に旅行できる国の人たちはある程度限られている。

もちろん『深夜特急』で沢木耕太郎氏が旅した時代とも違い、インターネットでも情報は溢れ、各地の観光業の発展により様々なサービスが展開されている。観光地として発展することにより残念な部分も否めないが、様々な魅力的な場所に旅行がしやすくなっていることは間違いない。

せっかく与えられたチャンス、僕はその絶景のある場所にできるだけ立ちたいと思っている。写真で見る風景と、実際目の当たりにする風景は、もちろん全然違うのだから。

その場に立つことで、目で見て、耳で聞いて、鼻で匂って、舌で味わい、肌で感じる。五感全てをフル活用できる。

僕の体には目で見た風景以外に、アザラシの鳴き声、糞臭いペンギンコロニー、南極海の塩分、流水の冷たさ、色々な感覚が残っている。

言うておくが、僕は南極調査員でもないし冒険家でもない。珍獣ハンターでもないし、ウルルンしているわけでもない。普通の一般旅行者だ。

そんな普通の旅行者でも南極に行きたいと思えば行けてしまう時代。

『そうだ、南極に行こう』

南極ではなくても、まるで京都にでもふらっと行くような感覚で、一度行って見たかった様々な場所に、ブラリ（Brali）と旅をしてみてもいいだろう。

『十人十旅』

おしえてタビテク

旅を体験し、続け、重ねた者しか知らない「旅のテクニック」がある。そんな賢人たちの「旅のテクニック」をご紹介しますコーナー。

旅のテクニックを聞きまわっていると、田中美咲さんからこんな投稿をいただいた。

「おねだり」術

→女の子は、屋台などで、「これ、私にプレゼントしてくれるよね？」

と言うとだいたいの人は無料でくれる。

というのだ。これは女の子のバックパッカーにとっては重要ではないか。

ま、男にはできない技なのであろうが興味は尽きない。

ということで「おねだり」術なるものを聞いてみた。

Q：どんなシチュエーションでどんなタイミングで「おねだり」術を使いますか？

A:平均的な「おねだり」術でいうと、

お腹空いていたり、ただなんとなく散歩しているときに現地の方と常に笑顔で声かけたり、挨拶するようにしています。

屋台なら、「おいしそー！たべようかなあ、、、」とか。

そのうちに、相手から買ってよオーラを話の中に織り交ぜてくるので、そこで一言、

「それなら私に一つプレゼントしてくれる？」

もしくは

「これってタダなの？」

(タダな訳ないのは承知の上で)言います。

そうすると、気前のいい人や女好きな人はまた来てくれるならいいよ、となります。

たいがい最低でも半額にはなるかと。お土産屋さんもこの調子でいくと原価くらいで買えます！

※厳しいおばちゃんには通用しない。

最終手段は、「帰るふり」をすることで、帰られて売り上げないよりはいいという状況をつくりだす。

ん〜なるほど、「帰るふり作戦」くらいは値引き交渉で使ったことあるけどなあ。

Q:どこで試したことがありますか？、

A:タイの屋台、インドのチャイ屋さん、ミャンマーの屋台、カンボジアのアイス売りのお兄さん、ボリビアのレストラン、エジプトの屋台etc。

基本はアジアの屋台がお願いしやすいです。(笑)

屋台が狙い目みたいですね～。

Q：どんなモノをもらったことがありますか？

A:屋台で出している食べ物ならほとんどもらえます！

あとカンボジアやタイなら外で売っているアクセサリーなども可能です。

インド、バングラデシュでは宿代も払ってくれました。

→海外旅行で食費はほとんどかかりません（笑）

Q:最後にどれくらいの確率で成功するんですか？

A:厳しいおばちゃんなどを除けば、ほぼ100%です。

え～、女の子の旅ってそうなんですか～。知りませんでした。

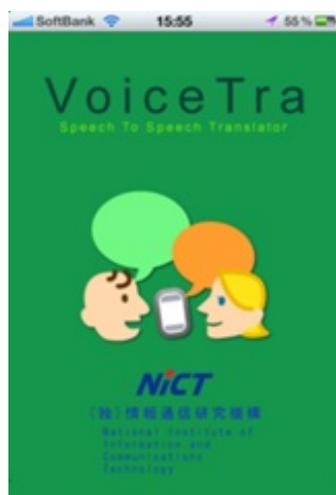
旅する女の子のみなさん、「おねだり」術使ってますか？ぜひお試しを。

読者の方へ：「こんな旅のテクニック知ってるよ」とかありましたらご投稿ください。お待ちしております。

旅で使えるデジタルアプリ

このコーナーでは文字通り旅で使えるスマートフォンのアプリの紹介です。昨今ではスマートフォンやタブレットがバックパッカーの間でも普及し、旅の途中も離せない人が増加中。旅を助けてくれる、旅をもっと面白くしてくれるアプリを紹介していきます。

今回は「VoiceTra」



このアプリは翻訳ソフトです。

数多くある翻訳ソフトでも、喋ってくれる翻訳ソフトは少ないでしょう。

さらに喋ってくれるだけではなく、音声認識するので

喋った内容が翻訳されるという画期的なものです。

そして、無料なのです。



しかも！和英はもちろんのこと、中国語、インドネシア語、ベトナム語などにも対応しています。

(音声対応でないものは、スペイン語やフランス語やロシア語なども対応)



使い方はいたって簡単。

1. まずは言語選択。何語を何語に訳すかを設定します。
2. そのまま電話で喋るように翻訳する内容（文章）をゆっくり喋ります。
3. 自動的にネットに接続して翻訳処理します。
4. 翻訳結果が表示され、読み上げられます。



この逆の使い方として、旅先で現地人に喋ってもらい音声認識し翻訳してヒヤリングするという使い方でもできそうです。

難点は、ネット環境がないと使えないのと、長い文章は向いていない。そして正しい日本語の文法で喋らないと、機械が理解出来ない場合があるようです。

それと、このアプリを筆者はまだ海外で使ったことがないので威力をどれくらい発揮できるか今のところ未知です。

このアプリはデータを取り、テストを繰り返しつつ修正をどんどん加えていってるとのことですので

皆さん使い倒してみてもいいのではないでしょうか？

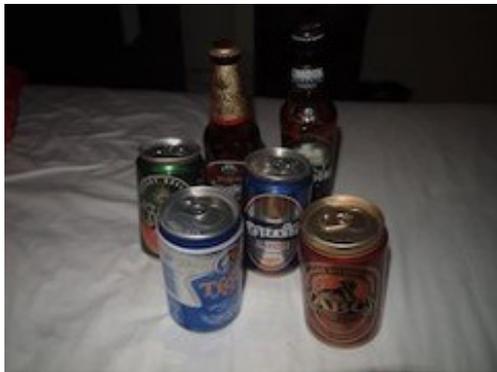
読者の方へ：「こんな使えるアプリあるよ」など使えるアプリの感想をご投稿ください。

HANGOVER in the WORLD ～旅先の酒と肴～

カンボジアの酒

カンボジアのスーパーに行ったら
ビールが平積みで並べて売っていた。
せっかくカンボジアに来たので
カンボジアで買ったビールを飲みまくってみよう。

購入したのは全6種類。（ここでは一種類は別の国のビールなので割愛）
缶ビール4種、瓶ビール2種だ。
残念ながら、宿泊中のゲストハウスは
冷蔵庫がないため、全て常温で味わってみた。



・アンコールプレミアムドラフト
アルコール度数5%
柔らかい口当たりで後味もすっと引く
万人受けする味
バイヨンピルスナーと似ている。
「マイカントリー オブ ビア」のコピーの通り
カンボジアを代表するビール。



アンコールビールの看板は
プノンペンの至る所で見かける。



カフェやレストランには
アンコールビールのロゴの下に
レストラン名、カフェ名が書かれた看板を見る。
日本の居酒屋や小料理屋の看板に
「日本盛」と書かれているのと同じ感じだろうか。
もちろんエンブレムには「アンコールワット」。



・ゴールドクラウンビール
アルコール度数4.5%
最初は口当たりが良いが
あとから軽い苦味が来る。
あまり重くないビールが好きな方にオススメ。
アルコール度数も少し低いので
ビールの苦みが好きでゴクゴクと飲みたい人必飲。
カンボジア・ブルワリー社の製品。



・バイヨンピルスナー
アルコール度数4.5%

柔らかい口当たりで舌にすぐに引く苦味を感じる。
暑い最中、歩き回ってもう限界だーという時
喉が乾いた時にぐーっと飲みたくなるビール。



カンボジアのアンコール遺跡を形成する
ヒンドゥー・仏教混交の寺院跡を意味するバイヨン。
カンボジアのビールメーカーの銘柄で
エンブレムに有名な四面像を冠している
微笑みのお顔がありがたい。



・ABCエクストラスタウト
アルコール度数8%
黒ビール
口の中に含んだ瞬間に苦味と甘みが広がる
癖の有る味だが
黒ビールの中ではまろやか。
どうも黒ビールは苦手という人は
あまり好ましくないかもしれない。
アルコール度数も8%と高くガツンとくる。



午前中に飲んだのだが
昼ビールに度数の高い物を飲むと
酔いが早く、夕方くらいまで微酔い気分だった。

・キングダムピルスナー
アルコール度数5%
最初は苦味が口のなかに広がるが
後味はスーッと引く。
苦味が好きな人が何杯ものみたくなるビール。



キングダムブルワリー社のビールで
2010年頃にできた。
カンボジアの新しいビール会社
今後、アンコールビールの牙城を崩せるか
注目のルーキー。

今回飲んだビールで一番飲みやすいのは
やはりアンコールビールだった。
プノンペンのもどこでも飲め
国王の居住する王宮の休憩所でも
「アンコールビア」というと出してくれる。
とにかく日中は暑いので冷えているビールは
本当にありがたい、つついクイクイと飲んでしまう。
ただ治安はそれほど良くないので
我を無くして飲むとどうなるかはわからない。

どこの国でも飲み過ぎ注意は変わらない。

■情報投稿者

五十嵐圭

2011年4月に会社を辞めて半年間のバックパック旅行中。

初めての一人旅に戸惑いながら東南アジアを中心に

フラフラと移動しています。

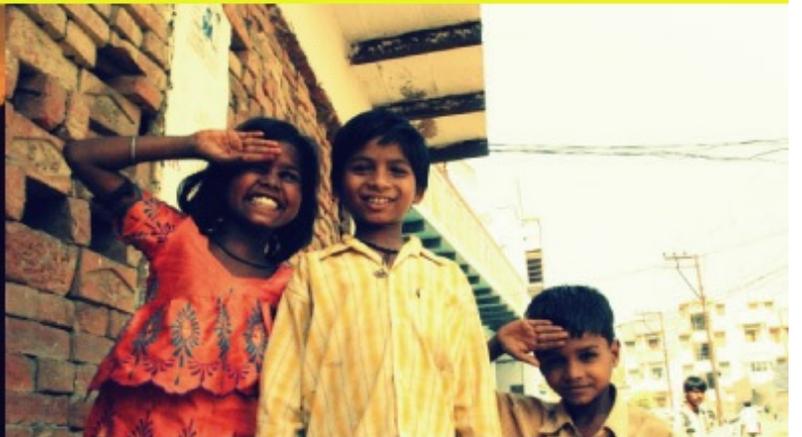
ブログ：つれづれ報告書

<http://turedure2006.blog.so-net.ne.jp/>



特集 アジア

日本人がいつの時代かに置き忘れてしまった何かが、まだあるような
なんだか懐かしい世界。それがアジア。その何かに触れたくてまた旅する。



プノンペン

■Writer & Photographer

五十嵐圭

■Age

35歳

■Profile

2011年4月に会社を辞めて半年間のバックパック旅行中。

初めての一人旅に戸惑いながら東南アジアを中心に

フラフラと移動しています。

ブログ：つれづれ報告書

<http://turedure2006.blog.so-net.ne.jp/>



3月末で9年勤めた会社を辞めて
妻に無理を言って、半年間の約束を取り付け
バックパッカーとして、一人で東南アジアを回ることにした。
いままで、妻と二人で旅行をしていたので
一人で海外を歩くというのは初めての経験だ。
また、英語力もTOEICテストで3分の1の得点も
取れないほど悪い。年齢も35歳ともう若くはない。
正直、不安は募るばかりだ。

カンボジアにタイ・バンコクから空路で入った。
涼しい空港内から外に出たとたん、モアっとした高い気温が身体を襲う。
プノンペンの空港から街中までの交通機関は
タクシーかトゥクトゥク、バイクタクシーになる。
空港の到着出口を出ると、すぐに運転手の猛烈な営業を受ける。
ゆっくりタバコを吸っている間に数人に声をかけられるほどだ。

タバコを吸い終わりトゥクトゥクで、ゲストハウスの多い王宮近くまで移動する。



カンボジアというと内戦のイメージが強い。内戦時の残酷な虐殺は、キリングフィールドやトゥール・スレン虐殺博物館を訪問すると過酷な現実として突きつけられる。しかし、実際にプノンペンの街中を走ってみると大通りは舗装されて、大きな建物も建っておりその暗いイメージが払拭される。道路は自動車とバイクがひっきりなしに走っていてクラクションがパパー!と鳴り続け人々の生活は活気に溢れている。



統計の数字では表せない、国の勢いを見ることができる。カンボジアの人々はなんて強いのだろうと感じる。

まずは宿の確保だ。最初、訳もわからず15ドルのゲストハウスに泊まる。あまり良い部屋でなかったので一晩泊まってエアコンなしの6ドルの宿へ移動、やはり、エアコンがないと身体が辛かったので12ドルのゲストハウスに一晩で移動した。

もともと、最大でも一泊1000円までに宿泊費を

抑えるルールを自分に課していた。
(初日はオーバーしてしまったが)
価格的にぴったりのゲストハウスだった。
またそのゲストハウスはとても快適で
スタッフも、とても丁寧に対応してくれる。
すぐに5日間分の予約を取り、そこに滞在することに決めた。

初めての一人旅で寂しいかなと思っていたが
twitterで日本の友達とも交流ができ
妻ともSkypeで話ができる。
街中のいろいろなカフェやレストランでWi-Fiを利用し
インターネットに接続することができる。
その他の時間は街を歩いたり、写真を撮ったりと
あまり寂しいと思うことはない。
(本当の一人旅をしている人からしたら
twitterやSkypeは御法度なのかもしれないが・・・)

自分の好き勝手に移動できるのは
一人旅の一番良いところだろう。
なに気兼ねなく、宿を決め寝泊まりし
朝起きて、観光マップを見て
バイクタクシーを捕まえ、移動する。

のどが渴いたからカフェでビールでも飲むか
今日は疲れたからゲストハウスに帰って寝るか
気ままに決め、気ままに行動する。
一人旅ならではの自由だ。
しかし、観光に行っても
感動を共有できる人がいないのは
なんとも味気ない気もする。
同じ場所で同じ物を見て感じるができないのは
一人旅の大きなデメリットだなと感じた。

そのデメリットをもっとも感じたのは
一人で行った国立博物館だ。
内戦で大きなダメージを受けたカンボジアの文化を
見ることができる。
細かい細工が施された仏像やガネーシャの像

家を建てるときに水平を取るために使う炭壺もあったようだ。



一つ一つの展示物を見る度に感想を言いたいのだが、誰にも言えないもどかしさがあった。

今回の旅の中で強く感じていることは「きちんと英語を喋れるようになっておけば良かった」ということだ。中学生の頃、「英語なんて喋れなくても生きていける」などと言って、勉強していなかった自分を今、思い切り叱りつけたい。

何か困ったときに英語でのコミュニケーションで回避することができることはもちろんだが何か話しかけられても片言でしか意志の疎通ができないのがもどかしくもあり、相手に失礼な事しているなど思ってしまう。

プノンペンの人たちはよく話しかけてくれる。

ゲストハウスのスタッフは英語で欧米の旅人たちとコミュニケーションを取り自分が日本人だとわかると「こんにちは」と挨拶してくれる。泊まったゲストハウスの女の子は「私は侍が好きだ」と日本刀を振り下ろす真似まで見せてくれた。もちろん応戦、何度袈裟懸けに切り下ろしても女の子は無敵だ。何度でも、笑いながら持っている日本刀で攻撃してくる。そのやり取りを他のスタッフは笑いながら見ていた。

コンビニの店員も、現地通貨リエルの支払いに戸惑っていると

「ニセンゴヒャク」と一生懸命話してくれる。
バイクタクシーの運転手は「アジノモト」と声をかけてくれる。
もちろん、営業的要素は多いとは思いますが
その国の言語を一生懸命に話そうとしてくれることをうれしく思う。
一人で何度も困ったことがあったが
その人たちのおかげで快適に過ごすことができた。

プノンペンの夜は早い。
テレビ番組も23時に放送を終了する局もある。
治安もあまり良くないことから
夜はあまり出歩かず宿に戻った。
一人になり、そんなプノンペンの人々を思いながら
自分も日々勉強をしなくてはと
強く強く感じた。

日本脱出したことを疑われる台北滞在の日々 《台湾・台北編》

■Writer & Photographer

Chibirock

■Age

33歳

■Profile

Sigur RosとBeirutに夢中のメタル好きバックパッカー。台湾から始まりチベット越えてインド、タイでうだうだして10ヶ月ぶりに帰国。現在住所不定無職で先行き不透明なのに全く不安を感じていない33歳。

<http://blog.chibirock.net/>



諸々の理由により、勤労の義務を投げうっちゃって無期限アジア一人旅に出ることに
なりました、Chibirockです。

これまで友人や彼氏と周遊することはままあれど、ビビりだから一人は初なので、
何ヶ月...否、何日ねばれるかが最大の見所です。

33歳で仕事辞めちゃって結婚もしないでそういうのどうなの？なんて余計な心配
してくれちゃう人もいますが、当の本人は申し訳ないくらい、全く気にしていません。
行きたいから行く。以上！

ということで、一時は準備終わらず出国できないんじゃマイカと本気で変な汗出ましたが、
なんとか当日ギリギリ荷造りを終え、無事成田より飛び立ちました。

とりあえずの目的地、台北にて、34℃とかの中、アホみたいに歩き回ったりしてます。

38℃の東京を経験すると、34℃とか全然よゆー。

東京でマンゴーが育つ日もそう遠くはないのか。

切手収集という、リアクションにしばしば困られる趣味をもつChibirock、海外に出たら

何はなくともまず切手。

ということで、まず1日目に出向いたのは、宿から歩いて1時間弱の郵政博物館。
前も来たから知ってるけど、5フロアとかあるでかい建物の中で、相変わらずやっぱり客はあたしだけだよね。

貸切状態で、世界の切手やポスト、郵便物仕分けの仕組み等を心おきなく楽しむ。
なんか有名な博物館いろいろあるけど、どうでもいい他のは。

この博物館のすぐ裏手には、切手やコインを売る店が密集してて、コレクターの聖地みたいになってます。ここで4シート購入。
切手は荷物にならないし、どこにでも売ってるのでお土産としても素晴らしいです。

食べ歩きもショッピングもしないので、適当に町中徘徊して、ふとひらめく。

あ、メイドカフェ行こう。

「欢迎光临 台北女僕喫茶 いらっしゃいませ ご主人様♥」



と、ピンクのメイド服を着たメイドの萌え看板が迎えてくれる「Fatimaid」へ潜入決定。
2階だから入るのがちょいドキドキしたが、入ってしまえばあらビックリ、カワイーメイドが流暢な日本語でめっちゃ丁寧案内してくれたよ！

軽食からがつつりディナーまでメニュー豊富、あらゆるニーズにお応えします。

「今日は、揚げ物、できません、申し訳ありません。」（日本語）

とんでもない、あるものでいいんだよ、あるもので！

ケチャップで絵描いてほしいがために、メイド手作りハンバーガーを注文。

萌えニャンコと「Fatimade」の文字、めっちゃ上手い。

秋葉の某有名店のカフェラテに描いてもらったのなんて、足元にも及ばないような完成度。

ハンバーガーの裏っかわには、「おかえりなさいませ」（日本語）

萌え～。

ハンバーガーは、台北スタンダードにならって、日本よりだいぶ薄味だったけど、おいしかったよ！

学校で日本語習うの？と聞いたら

「わたしたち、日本が好きだから、自分で、本で勉強してます。」

独学かあ。

勉強して、女僕（メイド）として従事してんのかあ。

あたし、何やってんだろ。

早速帰国して就職活動しようと本気で考えさせられた。

一瞬だけね。

Wi-Fi使い放題だしマンガもあるし、日本のメイドカフェみたいにキーキー変なアニメ声でまくしたてられもしないし、とっても居心地よし。

「今日は、台湾の七夕なので、ゆかたです。メイドのふくじゃなくてごめんなさい。」



萌え～。

すっかり気をよくして、プラス100元（270円）払ってあいるちゃん&つばさちゃんの写真撮らせてもらった。

あさってはメイドのふくになるというので、またきまーすと約束。

あれ？ なんかメイドカフェレポみたいになってるけど、あたし台湾にいますからね！！

Twitterでファミマのお弁当コーナーとか吉野家とかダイソーとか和風な写真
ぱっかりアップしてたらあたしの日本出国を疑う声が聞こえてきましたけど！
台湾ですよ！！

台湾人は神様です 《台湾・台南編》

いちお美術館なんか行ってみたりもしたけど、あんまりに実がない生活だったので、台北を後にしてみました。

噂の台湾新幹線で。

しかしこいつは駅が街から遠いし、あんまりにも速すぎて旅情に浸る暇もない。帰りは普通列車に乗ろうと、かたく誓う。

前々から親切だ親切だと思ってたけど、台湾の人の親切さは常軌を逸する。とにかくこれを報告したい。食べ物レポートよりも早く。

彼、阿銘との出会いはFlickr。

前回の台湾の写真をアップした時に、突然見ず知らずの彼から

「台湾に遊びにおいでよ」とコメントをもらったのが始まり。

ファーストコンタクトにしては3歩程入り込みすぎだろと面食らったけど、実際に台湾に行くつもりだったので、それから頻繁にやりとりをするようになった。



すると、彼のガールフレンドが、会ったこともないあたしに部屋を貸してくれると。実家で部屋が余ってんのかと思うじゃん。

バイク2ケツで連れてきてもらった高級アパートは、彼女の一人暮らしの部屋で、その部屋をまるまる無期限で明け渡してくれると。

自分は彼氏んちで寝るから、いつまでも好きに使ってと、枕カバーやシーツを新品のものに替えてくれ、ヘアバンドや歯磨き粉、ウェルカムパイナップルケーキまで与えられた。

何、この親切さ！！

その後も食費、交通費、はたまた駅で買ったポストカード代まで、何一つあたしには払わせず、携帯、チャリンコ、しまいには家で使う用のPCまで貸してくれて、もうこれそこいらの箱入り娘どもよりも甘やかされてはいまいか？

しかも阿銘の友達まで連れ立って、貴重な週末を朝から夜まであたしのために費やしてくれ、かといってアジア周辺にありがちな、

「もう食えないっつってなのに！」みたいな過剰なおもてなしもなく、あくまでもあたしが居心地いいように取り計らってくれる。

「我想付錢(お金払いたい)」と申したところ、

「あなたはお姉ちゃんみたいなもんで家族だから、払う必要はない。僕らが日本に行ったときは、よろしく願いしまーす←ここ日本語」

と阿銘が言う。

なんとお礼を言っているのかわかりません、と申したところ、

「台湾であなたに会えたことが嬉しいんだから気にしないで。ただ楽しんで、いい思い出を作ってくればいいの。」

と、阿銘の友達の眞鍋かおり似の美女、リールンが言う。

はあ。もう頭が上がりません。

彼らからスマートかつあったかいおもてなしの心を学ばせていただきました。

どうお礼しているのかわからず凹んでたが、それもアレだなと思って、お言葉に甘え台南ライフをとことん楽しんでやることにしました。

今日は阿銘の愉快的仲間たちの一人、A-LuがやってるタイBBQレストランに行きました。

阿銘はチャリンコ乗りで、その仲間たちが次から次へと集合するこの店、見た目は完全にオシャレチャリンコ屋。

ありえないくらいに高いベスパの存在感がすげえ。

ありえない値段は酔っ払って忘れた。

奥のほうには個室がある。

なんでも4つの古い家屋をつなげて作ったと、A-Luが説明してくれる。

古いもんとかじゃれたもんが混ざると最強。

そういうものがこの街には多い気がする。台湾の京都と言われるだけある。

見るからにして頭の良さそうなナイスガイ、A-Luは、初対面で下ネタ爆発したがなお、ナイスガイだと思っている。

向かいに座っていたスーウェイ君は妙にハンサムだと思ったらやっぱりモデル。同じくモデルの彼女はあたしの半分くらいしかないね。横幅がね。

常々阿銘のFlickrアルバムで彼らの顔を見てたので、芸能人に会ったみたいなワクワク感が止まりません。

日本の皆さんに一番紹介したいのがトニー君。

月1で仕事で日本行ってて、新大久保に家あり。

日本語は日本人並みのぺら。

まあおかたの日本人と同じく、あたしがあんまり酒強くないって言うと

「絶対嘘だよ～～！（日本語）」

爆笑。

新大久保に家なんて金あるね～つったら

「いや～ボンボンですから、ほんとすみません！でもボンボンも楽じゃないよね～（日本語）」

爆笑。

初対面で中国語も口々に喋れないあたしを、歓迎してくれた彼らに太謝謝您了。お言葉に甘えていつまでもいてしまいそうです。危険マジ危険！

みんな、台湾（台南）の人に会ったら、ものすごい優しくしてあげてください！ものすごいね！

昨日サザエさんがTwitterでつぶやいてたんだ。

「記録する以上に、記録するに足りる日々を。サザエでございま～す！」

ガーン！！

昼間は暑いっつって、ブログ書こうかな～どうしようかな～とか毎日グダグダしてたあたしゃ、この言葉にハッとさせられ、昨日は思わず昼間炎天下のなか出かけて、バーサクにかかったかのように、4,5時間歩き続けたのち下痢になりました。

その結果、

カルチャー・クラブとか聴いてボケーとしながら、あんまりバイクが突進してくるのも気にせず歩く。

感じでカオスな道路状況を突破していく術を身につけた。

こうやって、経験値あがるのが楽しいんだ。

だから、「何すかコレ」ってのどンドン試していきたいんだ。
(海外に限る)

今日は夜市の話をしてします。

台湾で、日本の夏祭りみたいなもの、毎日どっかしらでやってんの。
「お腹すいたら来る」ノリ。屋外フードコート。

阿銘たちにまず連れてきてもらったのは台南でいちばんでかい花園夜市。
夜市は東南アジア本来の素のままの活気があって、小綺麗な台湾でも異国情緒を感じることができる場所。

地獄でよく人が突き落とされるような真っ赤な鍋から、日本人も安心のカニカマとか、ウインナーやら小籠包、よりどりみどりで困っちゃう。

しかし今日のチャレンジは、散々親切にしてもらったのにこれひとつで台湾が嫌いに

なるくらいの破壊力をもつ臭豆腐。

食べ物なのに獣の臭いがするってどういうことなんだよ。



ただでも台湾人も香港人も好きなコイツ、そこらよく行く人間として克服しないことにはどうにも気がすまないので、ひるまずいっちゃうよ。

と、意気込んだのにさ、皆がイチオシするこの店の臭豆腐、全然獣臭がしない。つまり臭ければ臭いほどおいしいという訳でもないようだ。

拍子抜けで逆にテンション下がったので、残りはスーウェイ君に食ってもらった。彼は一人で躊躇なくモリモリ食いつくした。彼、モデルなのにそんなに食っていいもんなんだ。揚げ物。

と違ってたら次にこの「テンプラ」食べと彼に渡されたのは、見た感じ串にささったさつま揚げ。台湾（と、日本のどっかの地方）では、こういうものを「テンプラ」とよぶのです。おしゃれなジュースバーにもあったりして、フライドポテトみたいな立場にある。



なんだあんた、ほんと揚げ物好きねえ、太ったら仕事なくなるよ？
なんつって食べてみたら

つか、これ、今日イチ！！
地味けどこの「テンプラ」まじうまかった。
味は？って...とってもおいしいさつま揚げ。ごめん。語彙少なくてごめん。

とにかく、揚げたて「テンプラ」、つな八よりいい。
違うか。土俵が違うな。

しかし揚げ物が多いんだよな。台湾。

ところかわりまして台南の大東夜市。

入り口にはパンの山。

ん十種類ものパンが一堂に会する壮大な光景、パン好きChibirockにとっては
ヘブン・オブ・パン。

もうこれだけで十分だけど、ここは日本にもあるということで今回は指くわえて
ガマンの子。

スーシーはみんな好きなのでどこにでも屋台がある。

カラッカラに乾いた怪しい色のネタには全くそそられないけど。

あんま屋外で食べるイメージないけど、ステーキは夜市で超人気。

ベトナム人なんか朝から食うからね。

だからあんなにガツガツとがめついんだろうね。

味は、まあ、ガストのがちょい上、くらい、だけど、肉って、テンションあがりやすいものね。
でも、ひとくちふたくちで結構。

飲み物屋台屋前で、どれ飲みたい？って聞かれる。

ここはあえて全然見当たらない「酪梨布丁牛乳」にした。

布丁はプリンなんだけど。酪梨ってなんだ。

英語でなんていうんだっけ...って皆わからず、飲んでも特徴ない味で

モヤった空気のまま曖昧になったが、後で調べたらアボカドだった。

なるほど、ネットリ感が乳製品系てことか。

リールンちゃんはつけまつげ屋でしばし悩む。

「浜崎あゆみ型」「洋物型」とか、何を根拠に分けたかわからないカテゴリが
数十種類よりどりみどり。

ダンスのショーに使うっつってリールンちゃん「倅田來未型」をお買い上げ。

100円しない、安い。

iPhoneアクセサリ屋台では、スティーブ・ジョブスもがっかりの、iPhoneのデザイン性を

完全シカトしたお茶目なケースなどを格安でご提供。

当たっちゃったら心底困るのでやらないが、パチンコとか輪投げとかで景品がもらえるゲーム屋台も多数。

てかほんとに欲しいの？それ欲しくてやってんの？

「熱にうかされて欲しいと思い込み買って見たものの翌朝になったらすごい後悔したけどなんかまだ捨てるに捨てられない系」

っていうのは一番やっかいだよ！よく考えてね！

ドラえもんの看板を掲げるあの屋台は何？マジでどら焼き？

日本でも食えるからいいやと一旦スルーしたけど、いやまて、

焼きたてのどら焼きって食えるわけないなと試してみた。

バタークリームとかチョコとか各種フレーバーそろってます。

おばちゃんしれっとした顔で、音速の速さでどら焼きの皮を

ひっくり返してはまとめて引き揚げる。これは一見の価値あり。

実際のどら焼きの作り方は知らないけど、食感も味も確かにどら焼きだったので、フライパンでできるってことだな。

どら焼き屋台とは盲点。日本でも人気出るんじゃないかね、誰かやればいいのに。

台湾の食べ物がてっとり早く体験できる夜市、時間のない旅人にも最適だね！

日本で夏祭りが恋しくなったら、台湾にいらっしゃい！

<次号へ続く>

ラオスにある秘境

■Writer & Photographer

ワールドハッカー

■Age

30歳

■Profile

元バックパッカーで、現在は職業ハッカー。。

ブログ「World Hacks!」にて、海外旅行関連の情報を毎日発信しています。

<http://packtripper.blog113.fc2.com>



バックパッカーとして旅行していると、

「秘境」と呼ばれる地域に行ってみたいという衝動に駆られる事がある。

レオナルド・ディカプリオ主演の映画「ビーチ」のように、ごく一部の人にしか知られていない楽園が、世界のどこかにあるのではないかという思いが頭の片隅にあり、その楽園を目指すといったことである。

とは言っても、現実にはそのような楽園は見つかることもない。せめて旅行ガイドブックに掲載されていないような「秘境」に行きたいという思いから、安宿にある「情報ノート」を読みあさることになる。

言うまでもないが、情報ノートとは、宿に宿泊する客が書き込みすることができるノートのこと。「○○の宿がよかった」、「△△の食堂は美味しい」、「××の国境は現在閉じているらしい」などなど、世界を旅するバックパッカー連中が、有益/無益な情報を書き込んでいる。

また、そのような情報だけではなく、
宿の主人へのお礼や、単なる自己主張を書いている人を見かけることも多々ある、
言わば、バックパッカーにとっての自由帳である。

情報ノートそれ自体で集客能力があり、
情報を欲している旅人は、情報ノート目当てで宿を選ぶこともある。

さて、タイを放浪していた私は
とある安宿の情報ノートに「秘境」を求めていた。

数年分の情報が蓄積されたその情報ノートをめくっていく中で
数多い情報の中から、自分の思い描く「秘境」に
一番近い情報をピックアップした。

「ラオスにある島」

内陸国のラオスに島があるのは甚だ疑問であったが、
行ってみて納得できた。

それは、
インドシナ半島を流れる広大なメコン川の中州であった。

ドラゴンボールのカメハウスのような島を想像していたが、
島は大きく、言われないとそれが中州であることがわからない。

メコン川を渡るボートで風を感じながら、
数日掛けてたどり着くその島を目の前に、ドキドキしていた。



着岸してすぐにコテージが目に入った。
情報ノートの通り、それがゲストハウスのようなものである。



しかし、誰もいない。

近くを歩き、第一村人を発見して、
ボディランゲージで宿泊の旨を伝えると、おじさんが来た。
どうやら、オーナーらしい。

オーナーは英語を話せないらしかった。
そのオーナーが見せる、英語で書かれた宿のルールを読んだ。

宿のルールはざっくりとこんな感じ

- ・コテージ1泊 2米ドル
 - ・1食 2米ドル (1人の場合)
 - ・貴重品は自己管理
 - ・夜は騒ぐな
 - ・麻薬などの違法行為はダメ
 - ・真っ裸でのスイミングはダメ
 - ・暗くなってからのスイミングはダメ
 - ・村人は英語を話せないが我慢してください
- などなど14項目あった。

あと、ラオス語-英語変換表のようなものを使いながら、
宿泊条件などを時間をかけて、オーナーと、
「dinner」 ... 「pig」 ... 「OK?」
といった具合に指さし会話帳的な会話を続けた。

その会話の中で分かったのだが、
どうやら宿泊客はいないようだ。
オーナーは、2週間前には客がいたようなことを言っていた。

ここまで来て、宿泊しないわけにはいかない。

そうして、秘境での生活が始まった。

住居スペースとしては、
サッカーコートの半分ぐらいの広さに
コテージが2棟とトイレが1棟あるだけで、がらんとしている。
客は私以外誰もいないので貸し切り状態。

シャワーは？とオーナーに尋ねると、メコン川を指さす。
何とワイルドでしょう！

宿のルールにあるとおり、
暗くなる前にメコン川で入浴(沐浴?)をする。
(別のルールに抵触する気はしたが...)

メコン川は、
スイミングができるだけあって、
水が澄んでおり、綺麗であった。

食生活としては、
1食2米ドルと少し高い気もしていたが、納得できた。

朝昼夕の1日3回、近所の村からおばちゃんがやって来て、
私の目の前で、私のためだけに料理を作ってくれた。
村人が普段食べているような料理であろう、
地元で取れた魚や野菜を使った料理で、
それにラオス特有のもち米を加えた定食は、素朴でものすごくおいしい。



昼間の過ごし方としては、

- ・島を探索
- ・メコン川でバタフライ
- ・近所の村に出かけて村人とコミュニケーション

などなど自由気まま楽しんでいた。

島には寺や学校や売店もあり、ごくごく普通の生活が営まれているようであった。

少しして噂が広がったのか、
村長らしき人が来て、私を家に招待してくれた。
全く言葉は通じなかったが、
家族に私のことを紹介して、握手をしたり、デジカメで写真を撮ったりした。
デジカメを覗いて村人の喜ぶ顔から、デジカメのコミュカの高さに改めて感謝した。



調子にのった村長的な人は、近所の村に私を連れまわす。
途中から飽きだした私に気づいたのか、
7軒程、民家をまわったあたりで解放してくれた。



夜になると真っ暗。
秘境と呼ばれるだけあって、島には電気が通っていないらしかった。
月明かりで一人ビールを飲みながら旅を振り返りながら物思いにふけていた。

このようにして、2泊3日の秘境生活は終了した。

全く、外界から隔離された世界であった。

物理的にはメコン川で隔離されていたのだが、
タイムスリップをしたかのような錯覚に陥った。
またその状況を非常に楽しむことができた。

今回、あえて秘境の場所を伝えることは避ける。

そこが秘境で無くなってしまいう気がするから。

自分で探してこそ、自分にとって秘境になるのではなかろうか。

秘境に行ってみてそう感じた。

■Writer & Photographer

Tanon

■Age

もうすぐ素敵な30歳

■Profile

第二の故郷はThailand ☆ゾウに会いたくて渡タイ。

23歳をプーケットで迎えてからいつの間にかタイにどっぷり。

刺繍モノやキッチン雑貨を市場で探すのがこの上なく幸せ☆

地球をぐるりと廻る日を夢見つつ、

まずは次の渡タイをいつにしよう・・・とカレンダーと相談の日々。

タイのローカルデザートでホッと一息 アイスぱん

ちりちり〜ん♪ ぽぼッぽぼぽぼッ

今日も鐘を鳴らしながらアイスおじさんはバイクで登場。
おじさんのバイクの左側には銀色で筒型のアイスタンクと
日よけの parasol が付いています。



☆《今日はバニラにする》

そう伝えるとバイクに座ったまま

腕をタンクの底におもいきり伸ばし、スプーンで直径2cm程のまあるい

小さなアイスを3・4個ころころっと取り出します。

★《カップにするかい？パンにするかい??》

タイではコーンの代わりに薄切り食パンにアイスを挟むのです。

タンクの中は真ん中で2つに仕切られていて
バニラとココナッツ味を選べます。

ちょっと欲張りさんにはミックスもおすすめ。

トッピングには もち米や、緑豆、とうもろこし！
一瞬アイスにもち米・・・！？だけでも これが意外と合うからこれまたびっくり！！
(※タイのヨーグルトには とうもろこし入りもあるんですヨ。)

一枚の食パンを半分に折って間にアイスを挟み
ビニールに入れて ほいっ。



渡した10バーツコインを エプロンの前ポケットに放り込むおじさん。

接客というには程遠くて、ちょっとそっけないくらいだけど
かしまらないこの距離が
アジアの片隅に今身を置いているんだと感じられて 心地いいのです。

受け取ったアイスパンを食べると
パンの柔らかさと 冷たくて甘〜いアイスが溶けあって何とも言えない美味しさ。



パンに挟むことでアイスの溶け具合が緩やかになるのは
暑い国ならではの知恵だなあ・・・

なんてアイス片手に空を見上げながら南国の午後は過ぎてゆきます・・・

これから暑くなる日本でも、今年は【アイスぱん】おひとついかがですか？

旅の便利グッズ

旅に持って歩く基本的なグッズとは別に、意外と役立つとか、この地域に行くなら便利など、人によって便利なグッズを知ってたりする。これから旅にでる人はご参考までに。

(投稿によりますので、かなりな個人的見解になってます)

■ギャッツビーのフェイシャルシート

深夜移動する際には顔を洗えないので、翌朝スッキリしたい人には重宝します。



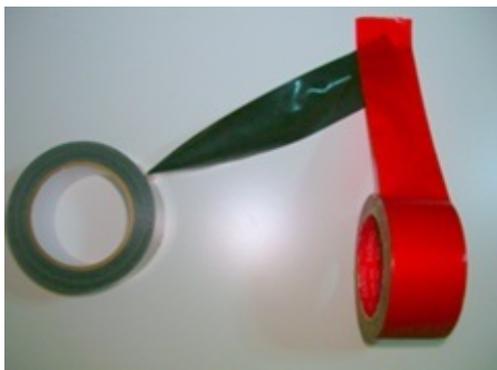
■自転車の籠につけるようなゴムのロープ

洗濯物干しにも使えるし、荷物をくくったりもできます。



■布ガムテープ

色々補強したり（ザックカバーなど）、名前付けたり、紐の代わりになったり万能選手。最近はカラーガムテープもあるので目立たせたいならカラー。



■小さなジップロック

各国の余った小銭を入れたりできます。濡れてはいけない物の、一時避難にも使えます。



■圧縮袋

衣類をいくつかに分けてパッキングに使います。冬は特に必要です。100均のものは壊れやすいので予備を持参した方が良いでしょう。



■トラベル湯沸しポット

コンパクト（高さ20センチ程）で軽いので邪魔にならず、お茶を沸かしたりカップメンを作ったりできます。



読者の方へ：旅でこんなグッズが重宝した、助かった、ウケたモノありませんか？ぜひご投稿ください。

自炊派の手料理

自炊派の手料理 カレースープパスタ 二人分



アジアなどでは外食したほうが美味しいし何と言っても安いので自炊はなかなかしませんが、ヨーロッパとなると節約のためにも自炊になりがち。ここではそんな自炊派のためのレシピを紹介。

ヨーロッパではやはりパスタが安くてお腹いっぱいになる主食。扱いやすいのがショートパスタ。そして旅で持って歩くといいのが、カレーパウダーなんです。そのカレーパウダーを使ったレシピです。

準備するものは

■ペンネ 150g (カールの方がおすすめ)



■カレー粉 小さじ2杯くらい

■人参1/3、玉葱1/4、ソーセージなど。(写真ではベーコン)

■コンソメ (スープの素) 2個

■オリーブオイル (なければ普通の料理油)



作り方

- ① 人参、玉葱、ソーセージをスライスする。
- ② 鍋にオリーブオイルを入れて熱する。
- ③ オイルが熱せられたらソーセージを入れ火が通ったら人参と玉葱を入れる。



- ④ しんなりしてきたら、水600CCを入れ沸騰するまで待つ。
- ⑤ 沸騰したらコンソメを入れ、さらにカレー粉を入れる。
- ⑥ アクをとり、塩などで味を整えたらペンネを入れ茹でる。



- ⑦ スープ皿などに取り分ける。



例えばペンネはパリで500gが1.05ユーロ（130円くらい）。
ゲストハウスにはペンネやオリーブオイルが残ってたりして
節約することもできます。

お試しあれ～。

読者様へ：自炊派のレシピの投稿をお待ちしています。

世界のポストコレクション

人々の気持ちや思いが詰まった伝言などが放り込まれるポスト。その気持ちや思いが街から街へ、または外国へと運ばれていく。電子メールやSNSなどの電子ツールが普及した昨今ではなかなか手紙などは書かなくなりましたが、旅先から手紙を書いてみるなんてどうでしょう。ポストカードなんかもいいですね。その国の切手を貼り付けて。あえて手書きで。遠く離れた日本の誰かに向けて。



アイルランド



アルバニア



イギリス



イギリス



イスラエル (パレスチナ自治区)



イタリア



イラン



インド



オランダ



クロアチア



スイス



スウェーデン



スペイン



スロベニア



セルビア



タイ



フランス

チェコ





ポーランド



ポルトガル



モロッコ

編集後記

■編集後記

何しろ投稿が少なかった。いや、「投稿したい」と連絡はいただくのだが、実際に何文字でテーマは「アジア」または「一人旅」で、とお願いすると返事がなくなってしまった。

テーマを外そうか、あえて編集せずに流れに任せるほうが面白いのかも、と色々悩みながらの創刊となった。

まずはとにかく創刊したい。そして長く続けたい。となると、完璧を求めず出来るところからブラリと始めようとなった。

次回からは写真主体のコンテンツも作りたい、ぼちぼち進めようと思う。

更には現地で頑張る日本人の宿やお店の人の宣伝を含めたレポートなんかも掲載できたらと思う。

まだまだブラリどころかヨチヨチといった感じだが、未永く見守っていただきたいです。

■次号予告

次号の発行は8月25日の予定です。

- ・テーマ「出会い」
- ・「旅人からの伝言」 特集ヨーロッパ
- ・「旅で使えるデジタルアプリ」
- ・「自炊派の手料理」
- ・「酔い道」旅先の酒と肴
- ・「世界のパーキングメーターコレクション」
- ・「旅の便利グッズ」
- ・「タビテク」

ほか

■記事募集

以下は随時募集中です。お気軽にお問い合わせください。

9月号については8月15日が締切り予定です。

現地でお店や宿などを経営されている方。あなたが滞在している現地の日常を書いてみませんか？3回連載で。もちろんお店や宿の紹介・宣伝を含めていただいて結構です。5件先着のご応募で締切りさせていただきます。

一般募集する記事

- ・テーマ → 「出会い」「海」など（1500字から2000字程度）

- ・「旅人からの伝言」 → 「ヨーロッパ」「中東」をクローズアップした紀行文など（1500字から2000字程度）
- ・「旅で使えるデジタルアプリ」 → その名の通りお勧めの旅で使えるアプリをご紹介します。
- ・「自炊派の手料理」 → 自炊されている方から「簡単」とか「美味しい」レシピを募集（1000字以内）要写真
- ・「酔い道」旅先の酒と肴 → 旅先での酒、肴、酒場、そしてそこで出会った人々などを連載（1000字以内）
- ・旅の便利グッズ → これがあると旅が便利、楽しくなる、旅先の現地人に喜ばれるなど連載
- ・旅のテクニック → この街ではこの方法で移動すると安くなるとか、両替はこうした方がイイとか旅人しか知らないテクニックなど連載（1000字以内）

Brali 創刊号

Braliは旅人が書き、旅人が読む、旅人のための旅ライフフリーマガジンです。

もちろん旅をしたことのない人を旅に誘う狙いもあります。

将来的には、旅人が旅先で書いたものを投稿してもらい、または特派員となってもらい、少ないかもしれないですが、原稿料をお支払いし旅資金にしてもらえることを夢見てこのフリーペーパーを出版しました。

まずは読者を増やして行きたいと思いますのでよろしくお願いします。

しばらくの間は、原稿料はお支払いできませんが、ライターや文筆家などを目指す方やトラベルフォトグラファーの方でプロを目指す方で趣旨をご理解いただきご協力いただける方がいらっしゃいましたら、ご一報ください

。

また、こういった取り組みへのご感想やご意見などありましたらご連絡くだされば幸甚です。

<http://p.booklog.jp/book/27972>

Brali公式ブログ

<http://bralimagazine.blogspot.com/>

著者 : kurinobu

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/kurinobu/profile>

発行所 : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/27972>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/27972>